



〔発行所〕 一般社団法人応用生態工学会事務局 〒102-0083 東京都千代田区麹町4-7-5 麹町ロイヤルビル405号室

TEL: 03-5216-8401 FAX: 03-5216-8520 E-mail: eces-manager@ecesj.com HP: <https://www.ecesj.com/>

〔発行者〕 一般社団法人応用生態工学会 (編集責任者: 専務理事 天野邦彦 事務局長 西牧均)

1	はじめに	1
2	会員管理サービスシステム導入のお知らせ	1
3	第1期第2回臨時総会開催報告	2
4	第1期第3回理事会開催報告	4
5	応用生態工学会 第27回さいたま大会2024(埼玉会館)報告	5
6	廣瀬賞等授賞式の開催	25
7	第1期第4回理事会開催報告	29
8	西浩司監事のご逝去について	30
9	応用生態工学会福岡 第10回遠賀川中島自然再生勉強会報告	30
10	応用生態工学会第28回新潟大会の開催案内	32
11	事務局より	32

1 はじめに

今号は、会員管理サービスシステム導入、昨年9月に行われた臨時総会、さいたま大会の開催報告、廣瀬賞授賞式の開催報告、理事会報告、学会に大きく貢献いただきました西浩司監事のご逝去、第28回新潟大会の開催予定等についてお伝えします。

2 会員管理サービスシステム導入のお知らせ

会員サービス向上のために、令和7年3月17日(月)より、会員管理サービスシステムを導入します。これにより新たに会員マイページが利用可能となります。会員マイページでできることは、以下の通りです。

- * ご自身の登録情報の閲覧、変更
- * 会費納付状況の照会
- * 会費のオンライン決済手続き(クレジットカード決済、コンビニ決済、銀行バンクチェック決済)
- * 会費の請求書、領収書PDFのダウンロード
- * 学会からのお知らせ閲覧

会員マイページは、右記のURLからログインできます(<https://ecesj.smoosy.atlas.jp/mypage/login>)。まずは会員マイページにログインし、ご自身の所属先情報や住所情報を確認してください。すべての正会員、学生会員および名誉会員の方にご対応いただく作業になりますので、ご協力をよろしくお願いいたします。初回ログインの際には、会員マイページ ログインボックス下部の[初めてログインする方はこちら]をクリックし、会員情報としてすでに登録しているメールアドレスを入力します。

メールアドレス宛にパスワード設定URLが送信されますので、リンクをクリックしてパスワードを登録し、会員マイページにログインしてください。

メールが届かない場合は、ヘルプのよくあるお問い合わせページをご参照ください。
登録されているメールアドレスが分からない場合は、事務局にお問合せください。

3 第1期第2回臨時総会開催報告

第1期第2回臨時総会における決議事項、報告事項等について、下記の通り報告します。

開催日時：令和6年9月20日 10時～11時30分

開催場所：さいたま市浦和区高砂3-1-4

さいたま会館小ホール

出席した正会員（社員）の数及びその行使することができる議決権の数

- (1) 議決権のある本会の正会員の総数841名
- (2) 総正会員の議決権の数841個
- (3) 出席正会員数（委任状提出者347名・議決権行使書提出者127名を含む）542名
- (4) 出席正会員の議決権の数542個

出席役員 会長（代表理事）占部城太郎

副会長（理事） 東信行

副会長（理事） 清水義彦

副会長（理事） 藤田光一

専務理事（理事）天野邦彦

理事 赤松良久

理事 沖津二郎

理事 小俣篤

理事 佐藤高広

理事 島村彰

理事 関島恒夫

理事 西廣淳

理事 平井秀輝

理事 光成政和

理事 柳川晃

理事 吉田丈人

理事 吉村千洋

理事 渡邊康玄

監事 鳥居敏男

監事 西浩司

議長 内藤正彦

議事録の作成に係る職務を行った者 天野邦彦専務理事

議題

決議事項 第1号議案 総会運営規程の件（承認されました）

報告事項 2-1 令和6年度予算案

2-2 令和6年度事業計画案

- 2－3 会員状況報告
- 2－4 総会・理事会・委員会の開催状況報告
- 2－5 会誌「応用生態工学」編集状況報告
- 2－6 令和5年度事業報告
- 2－7 諸規程の策定状況報告
- 2－8 2025年全国大会（検討状況）

議事の経過の要領及びその結果

定刻になり、天野専務理事が開会を宣言し、西牧事務局長から、本総会は、定款第17条第1項の規定による定足数を満たしており、適法に成立した旨の報告があった。次いで、定款第15条の規定により、出席した正会員の中から内藤正彦正会員が議長に選出された。さらに、議長は、定款第20条第1項の規定により、議事録署名人として、鳥居敏男監事、西浩司監事を指名し、議案の審議に入った。

【決議事項】

第1号議案 総会運営規程の件

議長は第1号議案を上程し、天野専務理事が、定款第21条に基づき、総会の運営に関する事項を規定するため、別紙第1号議案資料の通り総会運営規程を制定したい旨を説明した。このことについて、特段質問等はなく、議長は挙手による採決を行い賛成が過半数であると認め、承認可決した。

【報告事項】

2－1 令和6年度予算案

2－2 令和6年度事業計画案

天野専務理事から2－1 令和6年度予算案、2－2 令和6年度事業計画案について報告を行い特段の意見はなかった

2－3 会員状況報告

2－4 総会・理事会・委員会の開催状況報告

2－5 会誌「応用生態工学」編集状況報告

2－6 令和5年度事業報告

天野専務理事から2－3 会員状況報告、2－4 総会・理事会・委員会の開催状況報告、2－5 会誌「応用生態工学」編集状況報告、2－6 令和5年度事業報告について報告を行い特段の意見はなかった。

2－7 諸規程の策定状況報告

天野専務理事から2－7 諸規程の策定状況について①会員規程、②理事会運営規程、③地区会規程、④役員、委員等の旅費に関する規程、⑤謝金等に関する規程、⑥役員候補者選考委員会規程、⑦情報公開規程、⑧個人情報保護規程、⑨寄附金取扱規程、⑩廣瀬賞、研究奨励賞及び応用生態工学会社会実践賞に関する細則、⑪廣瀬ワークショップ助成に関する細則、の諸規程を策定した報告を行いその後質疑を行った

地区会規程についての意見及び質問として、以下のものがあった。

- ・地区会の地域分けは地方整備局の管轄に合わせるのが都合が良いとの意見があった。
- ・地区会の委員となるための条件について質問があったが、質問者の誤解であり、質疑は終了した。
- ・地区会にかかる経費は理事会が定める一定額とされているが地域の実情に応じて柔軟に考えてほしいとの意見があった。

・地区会についての地域の意見を聞いて欲しいとの意見があった。これまでも実施しているし、今後進める予定である旨返答した。

2－8 2025 年全国大会（検討状況）

天野専務理事から 2025 年大会は新潟で行うことで検討している旨報告を行い、新潟大学関島教授から挨拶があった

以上をもって議事の全部の審議を終了したので、議長は午前 11 時 30 分閉会を宣した。

4 第 1 期第 3 回理事会開催報告

第 1 期第 3 回理事会における決議事項、報告事項等について、下記の通り報告します。

開催日時；令和 6 年 8 月 20 日（火）13 時から 15 時 15 分

開催場所 河川財団大会議室（web 方式併用）

出席者 理事総数 20 名

出席理事 17 名（定足数 11 名）

会長 占部城太郎

副会長 東信行(WEB)、清水義彦(WEB)、藤田光一(WEB)

専務理事 天野邦彦

理事 赤松良久(WEB)、沖津二郎、小俣篤、片野泉(WEB)、佐藤高広(WEB)、島村彰、西廣淳(WEB)、平井秀揮、光成政和(WEB)、柳川晃（13 時 47 分より WEB 参加）、吉村千洋（13 時 50 分より WEB 参加）、渡邊康玄(WEB)

出席監事 2 名

監事 鳥居敏男、西浩司

その他の出席者 事務局長 西牧均

議題

決議事項（1 号議案から 7 号議案まで賛成多数で承認されました）

第 1 号議案 第 1 期第 2 回総会の招集決定の件

第 2 号議案 理事会運営規程策定の件

第 3 号議案 総会運営規程策定の件

第 4 号議案 地区会規程策定の件

第 5 号議案 役員候補者選考委員会規程策定の件

第 6 号議案 謝金に関する規程、廣瀬賞細則、ワークショップ助成細則改正の件

第 7 号議案 新規入会希望者承認の件

報告事項

1 将来構想委員会報告

2 雇用契約書（案）について

3 個人情報の利用目的等通知書（案）について

その他事項

1 地区会について

2 委員会の再構成について

5 応用生態工学会 第 27 回さいたま大会 2024（埼玉会館）報告

さいたま大会 2024 実行副委員長 西浩司

今年の応用生態工学会第 27 回大会は、9 月 18 日（水）～21 日（土）に埼玉会館にて開催されました。大会参加者は、正会員289名、非会員54名、学生74名、当日参加一般4名・学生2名、名誉会員1名で総計424名と過去最多の参加者数となり大変賑わいのある会となりました。

1. あいさつ（大会実行委員長 田中 規夫）

「一般社団法人応用生態工学会」として7月に新たなスタートを切った初年度に開催される記念すべき応用生態工学会第27回大会を「さいたま大会2024」として開催させていただきました。開催地・会場は平成21年（2009年）の第13回大会と同じ会場です。研究発表として口頭発表 46 件、ポスター発表 92 件の発表をいただき、自由集会 7 件も集会参加者が平均約 80 名と活発なものとなりました。7 件の企業展示で各企業の特徴ある最新の技術サービスや製品を紹介していただきました。さらに公開シンポジウム「ネイチャーポジティブ（自然再興）の実現に向けた応用生態工学の役割」を開催しました。公開シンポジウムには オンラインを含めて約500 名の方々にご参加いただきました。最終日には、今年度から始まった「廣瀬賞」の発表と受賞者の講演会を実施しました。

開催地であるさいたま市は、令和3年に「さいたま水と生きものプラン」を策定し、水環境及び生物多様性に係る施策を進めています。埼玉県は「埼玉県生物多様性保全戦略（2024（令和6）～2031（令和13）年度）」を策定し、目指す将来像として「ネイチャーポジティブ（自然再興）の実現」を掲げ、カーボンニュートラル（脱炭素）、サーキュラーエコノミー（循環経済）も加えた3つの課題の同時解決について言及するなど取り組みを進めています。このように、応用生態工学会が目標とする生物多様性の保全について高い関心を有しているさいたま市における公開シンポジウムのテーマを、「ネイチャーポジティブ（自然再興）の実現に向けた応用生態工学の役割」とし、最新の情報や技術などを皆さんと共有し、今後応用生態工学会で取り組むべきことについて議論をしました。環境省・笹渕紘平氏からは『ネイチャーポジティブの実現に向けた国の取り組み』において、ネイチャーポジティブの達成に向けて重要な取り組みのポイントを説明いただきました。国土交通省・新屋孝文氏からは『生物の生息・生育・繁殖の場としてもふさわしい河川整備及び流域全体としての生態系ネットワークのあり方』の提言内容と、河川を基軸とした生態系ネットワークの取組事例、今後の展開としての「流域総合水管理」の概念を説明いただきました。埼玉県・荒井理恵氏からは『埼玉県とネイチャーポジティブ～埼玉県生物多様性保全戦略を中心に～』という題目で、埼玉県における取組の変遷や、埼玉県生物多様性保全戦略の目指す将来像、施策展開等について説明いただきました。土木研究所・森照貴氏からは『河川におけるネイチャーポジティブの実現に必要なデータとモデリング』という題目で、定量的評価の重要性、使いやすいデータの蓄積と発展し続けるモデリングを使った予測の必要性が説明いただきました。いであ株式会社・幸福智氏からは『ネイチャーポジティブの評価と促進に関する技術』という題目で、行動変容の促進と場の状態評価技術をつなげるため、予測評価技術だけではなく社会のモデリングの重要性も説明されました。パネルディスカッションでは、絶滅危惧種の保全に関する研究の推進、工学と生態学の知見を組み合わせた取り組みの推進、行政・企業・研究者の連携強化、具体的な目標設定と評価方法の確立、社会全体の価値観の变革を促す取り組み等、応用生態工学会の役割・今後の課題が議論され、有意義な意見交換ができたと感じました。

翌日のエクスカージョンでは、埼玉県ならではの特徴のある現場として、見沼たんぼ首都高ビオトー

プ、芝川第一調節池、宝蔵寺沼ムジナモ自生地、荒川太郎右衛門地区自然再生地等を選定させていただきました。インフラ整備事業の場において「ネイチャーポジティブ(自然再興)の実現」に関連する先駆的な取り組みに関わり、ご活躍されている方を講師にお招きし、エクスカーショ参加者の皆様と意見を交わしながら現場をまわりました。いずれの地点においても産官学民連携の重要性が再確認されました。本大会は、「大会概要」に詳細をご報告しますように、大きなトラブルもなく大盛況のうちに終えることができました。懇親会では、全国からの美味しいお酒とおつまみで、若い世代とともに楽しむことができました。これもひとえに実行委員会の皆様、学会本部の関係者および参加者の皆様のご支援の賜物です。「一般社団法人応用生態工学会」の新たなスタートとして、本大会における、皆様の活発な意見交換、最新知見の共有、そして全国各地からお集まりいただいた参加者皆様の交流の成果を次に繋いでいただくことを期待して、ご報告と御礼の言葉と致します。

2. 大会概要

第 27 回さいたま大会の概要は以下の通りです。

(1) 会場

埼玉会館（埼玉県さいたま市浦和区）



第 1 回廣瀬賞 授賞式・記念講演会



受付の風景

(2) 大会日程

2024 年 9月18 日(水)~21 日(土)

- ・ 9 月18 日(水) 研究発表（ポスター）自由集会、企業展示
- ・ 9 月19 日(木) 研究発表（口頭・ポスター）自由集会、委員会、企業展示、懇親会
- ・ 9 月20 日(金) 公開シンポジウム、総会、幹事会・理事会、企業展示、廣瀬賞記念講演会・表彰式
- ・ 9 月21 日(土) エクスカーション

(3) 開催方法

対面（公開シンポジウムのみ対面+Web）



大会Web サイト

3. 研究発表

発表件数は、口頭発表が 46 件、ポスター発表が 92 件の合計 138 件でした。今回の発表件数を第 14 回札幌大会から第 26 回京都大会まで(第 16 回、第 21 回、第 25 回は 3 学合同大会のため対象外)と比較すると以下のように推移しており、今回大会は口頭発表、ポスター発表の合計で過去最多の発表件数となりました。

年	大会名	口頭発表件数	ポスター発表件数	合計
2010年	第14回札幌大会	36	68	104
2011年	第15回金沢大会	43	50	93
2013年	第17回大阪大会	45	70	115
2014年	第18回東京大会	45	73	118
2015年	第19回郡山大会	47	75	122
2016年	第20回東京大会	45	75	120
2018年	第22回東京大会	41	71	112
2019年	第23回広島大会	42	71	113
2020年	WEB 研究発表会	53 (オンライン発表)	(ポスター発表無し)	53
2021年	第24回札幌大会	109 (オンライン発表)	(ポスター発表無し)	109
2023年	第26回京都大会	54	78	132
2024年	第27回さいたま大会	46	92	138

(1) 口頭発表

口頭発表は、46 件の応募を頂きました。発表内容は12のセッションによる発表が行われました。各セッションの内訳は、河川環境 (14件)、海岸・海域・汽水域 (6件)、生息場・生息地評価 (5件)、動物 (3件)、保全生態 (3件)、環境DNA (3件)、外来種 (2件)、環境マネジメント (1件)、植物・植生 (1件)、グリーンインフラ (1件) でした。

最優秀口頭発表賞は、兵庫県立大学大学院の糸賀 友紀さん発表の「異なる水深のマルチトープ(水田退避溝)が水生動物群集にもたらす保全効果」が受賞されました。

今回の発表は、発表者各自が持ち込んだ PC に HDMI ケーブルを接続してスライドを投影いただく形式で開催しました。大きなトラブルもなく無事に口頭発表を進めることができたのは、発表者皆様の事前の接続確認や座長の的確な進行の賜物と存じます。この場を借りてお礼申し上げます。

報告：益子理 (いであ株式会社)

(2) ポスター発表

ポスター発表は、総数 92 点の応募を頂きました。ポスター発表については、発表タイトルやキーワードを踏まえ、10のセッションに分類しました。セッションの内訳は、河川環境 (27 点) ダム (3 点) 環境 DNA (10 点) 外来種 (4 点) モニタリング (7 点) 生息場・生息地評価 (13 点) 保全生態 (11 点) 植物・植生 (4 点) 生態系サービス・グリーンインフラ (9 点)、その他 (4 点) としました。

発表当日は、コアタイムを A (発表番号末尾奇数番号) と B (発表番号末尾偶数番号) に分けて実施頂きましたが、コアタイム以外の時間も含め、多数の来場者が訪れており、質疑応答や活発な意見交換

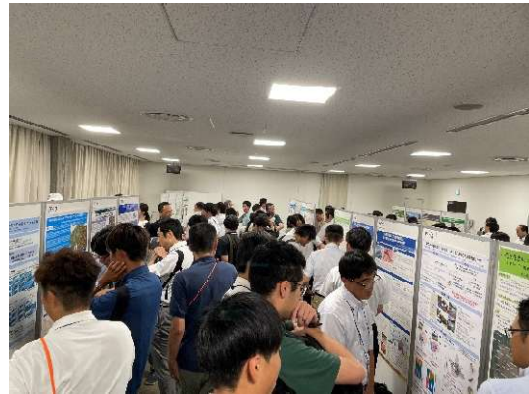
等が行われているのが各所で確認されました。ただし、運営側のミスで、コアタイムの案内が、プログラムと当日の案内において不整合があり、発表者を混乱させてしまったことをこの場を借りてお詫び申し上げます。

なお、最優秀ポスター発表賞は、土木研究所の岡井 陽平さんの発表による「河川におけるALBデータを活用した植物群落の分布特性の把握の試み【PA-5】」が受賞されたほか、優秀ポスター発表賞として、12 点が受賞されました。

最後に発表者の皆様、来場者の皆様、それから運営スタッフの皆様に、活発なポスター展示を無事に終えられた事に対して、この場をお借りしてお礼を申し上げます。



ポスター会場の様子（コアタイム A）



ポスター会場の様子（コアタイム B）

報告：加藤康充（株式会社オリエンタルコンサルタンツ）

(3) 発表賞

表彰は、審査対象を若手研究者（学部学生、大学院生、ポスドク等の若手会員）及び現場技術者または行政担当者とし、事前に審査対象となることを希望した発表者に限定しました。大会実行委員会および研究発表会表彰運営委員会を中心に優秀発表賞審査委員会を組織し、厳正な審査を経て受賞者を選考しました。ポスター発表では、92 件中 64 件が優秀発表の審査対象となり、13 件を「優秀ポスター発表賞」に選定しました。さらに最も優れたポスター発表を「最優秀ポスター発表賞」に選定しました。口頭発表では、46 件中29 件が優秀発表の審査対象となり、9 件を「優秀口頭研究発表賞」に選定しました。さらに最も優れた口頭発表を「最優秀口頭発表賞」として選定しました。

受賞研究発表は以下のとおりです。



表彰式参加の受賞者

報告：古旗 峻一（アジア航測株式会社）

【最優秀ポスター発表賞】「※」は発表者を示す。

PA-5 河川におけるALBデータを活用した植物群落の分布特性の把握の試み

※岡井 陽平(土木研究所)・溝口 裕太(同)・田中 孝幸(同)

【最優秀口頭発表賞】

OB3-1 異なる水深のマルチトープ(水田退避溝)が水生動物群集にもたらす保全効果

※系賀 友紀（兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科）・田和 康太（国立研究開発法人 国立環境研究所）、渡辺 黎也（同）・井上 陽人（同）・木村 純平（パタゴニア日本支社）、平峰 拓郎（株式会社坪口農事未来研究所）、佐川 志朗（兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科・兵庫県立コウノトリの郷公園）

【優秀ポスター発表賞】

PG-2 大淀川水系砂防事業におけるキムラグモ属の保全の取組

※山石 海斗（いであ株式会社）・中原 良一（同）・金光 浩伸（同）・吉田 英明（宮崎河川国道事務所 工務第二課）

PA-22 砂州と関わる河川地形と夏季水温の時空間分布特性

※イ ウン（北海道大学環境科学院）・根岸 淳二郎（北海道大学地球環境科学研究院）PI-2 水害防備林の生態系サービスに関する研究―地域住民の暮らしや防災意識に着目して―

※中島 幸香（熊本大学大学院）・三苫 千春（元熊本大学）・浅田 寛喜（熊本大学大学院）・皆川 朋子（同）

PH-1 釧路湿原におけるハンノキの年輪成長量に基づく釧路川蛇行再生の影響評価

※根本 優大（芝浦工業大学）・山口 拓弥（同）・大石 哲也（寒地土木研究所）・宮本 仁志（芝浦工業大学）

PC-6 環境DNA定量メタバーコーディング分析による検出魚類相の周年変化

※野村 七重（パシフィックコンサルタンツ株式会社）・渡部 健（同）、長野 和也（同）・地引 汰一（同）、蔭山 敦士（国土交通省 中部地方整備局 豊橋河川事務所）、角田 直輝（同）、岩下 拓磨（同）

PE-5 小型鳥類のモニタリングに適したトリガーカメラ用検知センサの検討

※吉田 彩乃（北海道大学大学院農学院）・矢澤 姫乃（同）・山田 浩之（北海道大学大学院農学研究院）・北野 雅人（竹中工務店技術研究所）・佐野 祐士（同）、宮田 弘樹（同）・三輪 隆（同）

PE-2 河川には何本の樹木があるのか？広葉樹林および竹林に適した航空レーザ計測データの処理手法

※溝口 裕太（土木研究所）・手塚 透吾（アジア航測）・周 月霞（名古屋大学）・戸田 祐嗣（同）・田中 孝幸（土木研究所）

PG-11 遊休水田に創出した小面積の再生湿地における水生動物群集の特徴

※田和 康太（国立環境研究所 気候変動適応センター）・松島 野枝（同）・西廣 淳（同）

PF-5 巨瀬川流域における魚類相把握と災害復旧に向けた環境配慮事項の検討

※山崎 庸平（九州大学大学院土木工学専攻）・林 博徳（九州大学大学院工学研究院環境社会部門）・Masukawa Lou（National Institute of Applied Sciences of Lyon）・鹿野 雄一（九州大学大学院工学研究院環境社会部門）

PE-3 棚田ビオトープ間を繋ぐコルゲート管魚道における魚介類の遡上実態の解明

※伊藤 蓮哉（兵庫県立大学大学院）・渡辺 黎也（同）・木村 純平（パタゴニア日本支社）・佐川 志朗（兵庫県立大学大学院）

PA-10 汽水域環境の予測評価：iRIC環境評価ソルバの新機能開発

※村上 純一（いであ株式会社）・川口 究（同）・中田 裕章（同）・衣川 涼子（同）・齋藤 靖史（同）・福永 葵衣（同）

PF-10 三峰川上流域における在来イワナの分布パターンとその決定要因について

柳生 将之（株式会社環境アセスメントセンター）・宮澤 明日加（同）・中村 泰幸（同）・元木 達也（同）

【優秀口頭発表賞】

OC2-2 環境DNA分析によるイトウ及びサクラマス産卵時期推定手法の検討—核/ミトコンドリア DNA 比を用いて—

※山田 夏希（株式会社建設技術研究所）・川尻 啓太（同）・井上 創（同）・紀國 聡（同）・鈴木 荘司（株式会社環境総合リサーチ）・古賀 暁洋（同）・王 軼聡（同）・熊谷 彰浩（国土交通省北海道開発局）・尾関敏久（同）・千葉 拓永（同）

OB6-2 日本列島における湧水特性および取水制限状況、水生昆虫の分類群的多様性の広域スケール評価

※岡本 聖矢（土木研究所 自然共生研究センター）・相川 隆生（同）・中川 光（同）・森 照貴（同）

OA3-4 江の川浜原ダム下流における効果的な土砂還元方法の検討

※大中 臨（山口大学大学院創成科学研究科）・山下 桃汰（西日本高速道路株式会社）・丸山 啓太（東京海洋大学 学術研究院 海洋環境科学部門）・赤松 良久（山口大学大学院創成科学研究科）

OA1-1 数値解析 (iRIC-GELATO) による魚類の遡上性能評価手法の開発

※坂本 和弥（株式会社開発工営社）・濱木 道大（同）・森田 大詞（同）・今野 義文（公益社団法人北海道栽培漁業振興公社）・清水 康行（北海学園大学）

OA2-2 鴨川七条落差工におけるアユの遡上難易度の評価手法に関する研究

※佐藤 和輝（京都大学）・藤原 正幸（同）・竹門 康弘（大阪公立大学）

OC5-3 宇治川に生息する濾過食者は生態機能を発揮しているか？：濾過様式の異なる二枚貝類と造網型に着目して

※原 直子（奈良女子大学大学院人間文化総合研究科）・田代 喬（名古屋大学減災連携研究センター）・土居 秀幸（京都大学大学院情報学研究）・竹門 康弘（大阪公立大学国際基幹教育機構）・片野 泉（奈良女子大学大学院自然科学系）

OA3-2 地下茎を有する水際植生の洪水による流失可能性に関する実験的検討

※五十嵐 善哉（埼玉大学大学院 理工学研究科）・田中 規夫（同）

OA2-5 神通川におけるサクラマス越夏場所である淵寿命の検討

丹羽 遥香（富山県立大学工学部 現所属：株式会社フジヤマ）・藤本 紫衣奈（富山県立大学工学部 現所属：砺波工業株式会社）横山 良太（株式会社建設環境研究所）・高木 真也（同）・小林 勘太（同）・島村 彰（同）・久加 朋子（富山県立大学大学院工学研究科）

4. 自由集会

本大会では、さまざまなテーマで10件の自由集会が開催されました。素晴らしい集会を企画、運営していただいた方々に御礼申し上げます。また、ほとんどの会場で定員を上回る多くの方に参加いただきました。会場の都合で立ち見の方が出たこと、時間の重複で希望の集会に参加できなかった方も多数居られたこ

とを、この場を借りてお詫び申し上げます。

いずれの会場でも、熱心な発表に続いて活発な意見交換が交わされており、今回の自由集会のテーマへの関心の高さがうかがわれました。どのテーマも、今後継続・発展していく内容であり、次年度以降の学会や自由集会でも引き続き活発な議論が行われることを期待しています。担当委員という役回り上、それぞれの集会に腰を据えて参加することができなかったのが悔やまれます。

(各自由集会の内容は、プログラムに掲載した企画者様からの文章をそのまま記載しております。ご了承ください。)

報告：伊川耕太（株式会社建設環境研究所）

(1) 自由集会 FB1：「流域治水によって変わる国づくり」

日時：9月18日(水) 9:00 ～ 11:00 (2Fラウンジ)

企画者：島谷幸宏（熊本県立大学）、皆川朋子（熊本大学）

内容：2020年の球磨川洪水を契機に球磨川流域を対象に開始された、JSTの地域共創拠点の流域治水研究（流域治水を核とした復興を起点とする持続社会、2020-2030年）は4年目を迎えている。本研究が進捗するにつれ、流域治水とは国土全体の在り方を根本的に問いなおし、より自然に寄り添った国土形成を進めることが必要なことが分かってきた。流域治水の基本は自然の営力を活用し、流域全体で流出抑制することである。その過程で様々な人々が共創し、新たな産業創成や環境の再生を行い、持続的な国土を形成することが肝である。本自由集会では、本研究拠点の基本的な考え方といくつかの研究成果について話題提供し、その後議論する。



(2) 自由集会 FC1：「自然とデジタルツイン：3次元が生み出す環境分野の革新とは？」

日時：9月18日(水) 9:00 ～ 11:00 (3C会議室)

企画者：大槻順朗（山梨大学）、中村圭吾（土木研究所）、佐藤隆洋（日本工営）、河野誉仁（鳥取大学）

内容：デジタルツインの概念は、さまざまなセクターで急速に発展しています。建設分野においては、i-Constructionの一環としてBIM/CIMの普及が進み、3次元データやモデルの利用が急速に広がっています。しかし、現状の3次元化は主に構造物に焦点を当てたものです。一方、自然環境の変化や人間の手による自然再生など、時間とともに変わる環境には、これまでとは異なる3次元の視点が求められています。環境分野では、既存のデータと技術を組み合わせ、新しいデジタル3次元世界を創造する必要があります。本自由集会では、デジタルツインの到来を前提に、いくつかの話題提供とともに、環境および社会基盤分野をどのように変革できるか、またどのように変革すべきかについて今後の展望と課題を議論する場を提供します。



(3) 自由集会FB2: 「いい川づくりのあり方を考える」

日時: 9月18日(水) 14:00 ~ 16:00 (2Fラウンジ)

企画者: 林博徳 (九州大学)、皆川朋子 (熊本大学)

内容: わが国の河川管理では、1990年代初頭から多自然型川づくりや川まちづくりなど、河川環境やまちづくりなどを包含した、様々な取り組みがなされてきました。近年では、気候変動やネイチャーポジティブというような世界的な潮流も相まって、河川分野でも流域治水やグリーンインフラなどのキーワードが多く使われるようになりました。また、世の中の価値観や河川に求められる機能もますます多様化しており、インクルーシブな河川管理が求められています。しかし、個別の川づくりあるいは河川管理の現場においては、キーワードや手法論が先行し、本当の意味での“いい川づくり”が、取り組まれていない事例も散見されます。本自由集会では、多自然川づくりの前身ともいえる「都市河川研究会」を立ち上げた吉村伸一氏、島谷幸宏氏を話題提供者にお招きし、当時の取り組みや経緯、川づくりの魅力、そして昨今の川づくりに対する懸念や期待などについてお話いただきます。そして、“いい川づくり”という原点に立ち返って、会場の皆さんとともに今後の“いい川づくり”の実践へ向けて、議論を深めたいと思います。



(4) 自由集会FC2: 「気候変動への適応と緩和そして生物多様性保全に貢献するNbS: 印旛沼流域での研究と実践」

日時: 9月18日(水) 14:00 ~ 16:00 (3C会議室)

企画者: 西廣淳 (国立環境研究所)、大槻順朗 (山梨大)、安立美奈子 (東邦大)

内容: 気候変動と生物多様性の損失は相互に関係しあう課題であり、ともに経済や社会に対する大きなリスクになっている。自然に基づく解決策 (NbS) は、気候変動への適応と緩和ならびに生物多様性保全のシナジーを生むアプローチとなることが期待されている。しかしNbSの計画や評価の方法論は十分に確立されていない。世界的にみて降水量が多く、植物のバイオマス成長が速いモンスーンアジアにおけるNbSの検討は特に不足している。提案者らは環境研究総合推進費「気候変動適応と緩和に貢献するNbS—流域スケールでの研究—」において、印旛沼流域 (千葉県) をモデル流域として、効果的な生態系管理とその空間計画論を研究するとともに、企業・市民・自治体と連携した実践を進めている。本集会ではプロジェクトの中間的な成果を報告し、NbSの有効性や課題について議論する。

(5) 自由集会FB3: 「河川の自然再生事業は、ネイチャーポジティブに寄与できたのか」

～九州における幾つかの事例～

日時: 9月18日(水) 16:00 ~ 18:00 (2Fラウンジ)

企画者: 鬼倉徳雄、林博徳、佐藤辰郎 (九州大学)、皆川朋子 (熊本大学)

内容: 平成29年7月九州北部豪雨 (筑後川水系)、令和2年7月豪雨 (球磨川水系) など、九州地方はここ数年、大きな豪雨災害を受けており、河川行政も学識者も、災害対策やそれに関連した研究に目移りしがちである。しかしながら、九州



の河川行政は古くより積極的に自然再生事業を行ってきた地域行政のひとつである。もちろん、豪雨災害

後の河川改修の中に自然再生の思想が大きく反映されたケースもある。本研究集会では、大河川から小河川まで、国交省から市町村まで、過去に行われたいくつかの自然再生の良い事例を挙げながら、流域治水やネイチャーポジティブの実践に向け、将来の積極的な自然再生施策の展開への足掛かりとしたい。

(6) 自由集会FC3: 「田んぼのいきものをどうやって守っていくか？」

—水田水域における多様な生物の保全と再生—その⑧

～応用生態工学テキスト: 水田環境の保全と再生～

日時: 9月18日(水) 16:00 ~ 18:00 (3C会議室)

企画者: 田和康太 (国立環境研究所)、佐川志朗 (兵庫県立大学・兵庫県立コウノトリの郷公園)、河口洋一 (徳島大学)、永山滋也 (岐阜大学)

内容: 2016年から始まった本自由集会も今回で8回目を数える。これまで様々な立場の演者の方々に話題提供いただき、多くの聴講者にもご参加いただいた。ここまでの自由集会の成果の一つとして、2021年における応用生態工学24巻1号の特集号「田んぼのいきものをどうやって守っていくか?—水田水域における多様な生物の保全と再生—」の掲載に至った。本自由集会や特集号の発展として、このたび応用生態工学テキスト第2弾「水田環境の保全と再生」を発刊する運びとなった。今年度の集会では、その内容を紹介するとともに、本書でキーワードとなっているいくつかの話題について議論する時間を設けた。



(7) 自由集会FD1: 「ダム湖における外来魚対策の現状と今後の展望—積極的駆除から低密度管理に向けて—」

日時: 9月18日(水) 16:00 ~ 18:00 (6A会議室)

企画者: 大杉 奉功 (一般財団法人水源地環境センター)、笹田直樹 (株式会社ウエスコ)、坂本正吾 (応用地質株式会社)、沖津二郎 (応用地質株式会社)、中井克樹 (琵琶湖博物館)、稲川崇史 (応用地質)、山下博康 (ウエスコ)

内容: 平成16 (2004) 年の外来生物法の施行から、丸二十年が経過し、河川環境やダム湖においても様々な駆除の取り組みがなされてきた。これらの取り組みによって伊豆沼や琵琶湖といった溜め池や自然湖沼のような環境におけるオオクチバスなどの外来魚の防除効果によって在来種が増加するといった効果が見られてきている。

ダム湖においても、たくさんのダム湖で外来魚の防除の取り組みが実践されてきており、外来魚の個体数を効果的に減少させる積極的駆除の取り組みから、かなり防除対策が進んで、外来魚が減少するとともに在来魚が増加してきている事例も増加しており、既に低密度管理をどのように進めるべきか?の議論が始まっている段階にある。

これらのダム湖における外来魚駆除の現状 (最前線) について、現時点の状況を整理するとともに、①増えすぎているダムでは積極的駆除を実施し、②低密度管理が可能なダムではそのフェーズに移行する、などの今後のダム湖における外来魚防除のあり方について皆さんと議論したい。



(8) 自由集会FB4: 「河川・ダムに関するデータベースについての意見交換会」

日時：9月18日(水) 18:00 ～ 20:00 (2Fラウンジ)

企画者：中村太士（北海道大学）・一柳英隆（水源地環境センター）・森照貴（土木研究所自然共生研究センター）

内容：日本の河川・ダムでは、国土交通省やその他管理者が、流量や水位、水温・水質、生息する生物相（河川水辺の国勢調査）など多くのデータを継続的に取得している。これらのデータを集約して整理することで、個人の取得のみでは成し得ない広域・長期の解析が可能になる。しかし、これらのデータは、河川・ダム管理者が使用する前提で管理されており、広域・長期で利用しようとする研究者にとっては必ずしも利用しやすい形にはなっていない。この意見交換会は、研究者側と河川・ダム管理者との意見交換を行い、両者にとって良い形を探ろうとするものである。研究者とデータを管理している行政とが意見交換ができる場があることが重要であり、大きな義務をもたずに、一步一步前進させたい。



(9) 自由集会FA1：「川の定量的環境目標の設定に向けて」

日時：2024年9月19日(木) 14:45 ～ 17:00 (小ホール)

企画者：中村太士（北海道大学）、森照貴（土木研究所自然共生研究センター）、一柳英隆（水源地環境センター・熊本県立大学）

内容：「河川生態学術研究会」と「生物の生息・生育・繁殖の場としてもふさわしい河川整備及び流域全体としての生態系ネットワークのあり方検討会」から出された提言には、河川環境に関する定量的な目標を設定することの重要性が記されている。2008年に出版された「川の環境目標を考える」でも目標設定の重要性が述べられているが、これまで具体的に設定されることはなかった。本集会では、二つの提言を紹介した後、「河川」と「ダム」での環境目標をどのように設定することができるのか、具体的な取り組みや可能性について発表する。また、目標が設定されたとしても、それを実行するための技術が必要であり、小さな自然再生を例として紹介する。目標とは必然的に定まるものではなく、議論して決めていくものであるとの考えのもと、集会参加者と意見交換も行いたい。



(10) 自由集会FB5：「航空レーザ測深データの河川管理への積極的な活用を考える」

日時：9月19日(木) 15:00 ～ 17:00 (2Fラウンジ)

企画者：溝口裕太（自然共生研究センター）、林田寿文（自然共生研究センター）、森本洋一（リバーフロント研究所）

内容：我が国では、航空レーザ測深（ALB）による河川測量が2016年に九頭竜川で実施されたのを皮切りに、2019年には、国土交通省河川保全企画室の事務連絡として、河川定期縦横断測量のALB（点群測量）による原則実施が通達されるなど、全国一級水系の直轄管理区間を中心にALBデータの蓄積が進められてきた。本自由集会は、今後も蓄積が期待できるALBデータの積極的な活用による河川管理の高度化、効率化について議論することを目的としている。ここでは、まず、河川分野へのALBの導入とその計測原理、ALBデータによる河川環境の把握手法と治水・環境機能の評価手法、河川管理でのALBデータ活用の実践例について話題提供を行う。その後、会場に集まった聴講者との意見交換を通じて、ALBデータの活用による河川管理の高度

化、効率化に向けた今後の方向性や可能性について議論を深める。

5. 公開シンポジウム

応用生態工学会第 27 回さいたま大会公開シンポジウム『ネイチャーポジティブ（自然再興）の実現に向けた応用生態工学の役割』は、2024 年 9 月 22 日（金）に埼玉会館小ホールを主会場とし、Zoomウェビナーと併用して開催しました。

応用生態工学会の目標である「生物多様性の保全」に関しては、新たな世界目標である昆明・モンテリオール生物多様性枠組の採択（2022年）を受け、2023年3月に「生物多様性国家戦略2023-2030」が策定されたほか、2024年3月には「ネイチャーポジティブ経済移行戦略」が4省庁名で出され、さらに2024年4月にはネイチャーポジティブ法とも言える「地域における生物の多様性の増進のための活動の促進等に関する法律」が施行されました。「人と生物の共存」については、生物の生息・生育・繁殖の場としてもふさわしい河川整備及び流域全体としての生態系ネットワークのあり方が検討されており、2024年5月には検討会から提言が提示されました。一方、さいたま大会の開催地である埼玉県は、「埼玉県生物多様性保全戦略（2024（令和6）～2031（令和13）年度）」を策定し、目指す将来像として「ネイチャーポジティブ（自然再興）の実現」を掲げ、カーボンニュートラル、サーキュラーエコノミーも加えた3つの課題の同時解決について言及しています。

このような背景のもと、本公開シンポジウムでは、これらの国内の大きな動きを踏まえて、最新の情報を共有するとともに、今後応用生態工学が取り組むべきこと、特に現場でネイチャーポジティブを支える技術体系などについて改めて議論し、提案を行うことを目的として開催されました。

初めに、大会委員長である埼玉大学大学院の田中規夫教授から上記の趣旨説明が行われ、続いて5名の専門家に講演をしていただきました。

最初の講演者は環境省自然環境局自然環境計画課の笹渕 紘平氏で、講演題目は『ネイチャーポジティブの実現に向けた国の取り組み』でした。ネイチャーポジティブの概念、生物多様性の現状と生物多様性に向けた国内外の動きについて概説し、ネイチャーポジティブ経済の実現に向けた取り組み、30by30、OECM、自然共生サイトの制度・事例を紹介し、ネイチャーポジティブの達成に向けて、1. 身近な自然を大切に、2. お金の流れを自然にやさしく、3. 人と自然の関係性を取り戻す、の3つのポイントが重要であることを説明されました。

二人目は、国土交通省水管理・国土保全局河川環境課の新屋 孝文氏で、『生物の生息・生育・繁殖の場としてもふさわしい河川整備及び流域全体としての生態系ネットワークのあり方』という題目でお話いただきました。河川を基軸とした生態系ネットワークの取組事例を紹介いただきました。また、



シンポジウムの様子



笹渕 紘平 氏の講演



新屋 孝文 氏の講演



荒井 理恵 氏の講演

「生物の生息・生育・繁殖の場としてもふさわしい河川整備及び流域全体としての生態系ネットワークのあり方」の提言内容と今後の展開として、流域総合水管理（治水・利水・環境間の「相乗効果の発現」と「利益相反の調整」を図る、利水・環境についても流域全体であらゆる関係者と協働して取り組む）を推進することについて説明されました。

三人目は埼玉県環境部みどり自然課の荒井 理恵 氏で、『埼玉県とネイチャーポジティブ～埼玉県生物多様性保全戦略を中心に～』という題目でお話いただきました。埼玉県における生物生息状況の現状と生物多様性に向けた埼玉県の取組の変遷について紹介いただきました。また、埼玉県生物多様性保全戦略の内容について、施策展開と目指す将来像、施策展開の4つの視点（①ネイチャーポジティブ・カーボンニュートラル・サーキュラーエコノミーの3つの課題の同時解決、②県・市町村・NPO等・県民の連携・共同、③ネイチャーポジティブ経済の推進、④埼玉版SDGsの達成）、推進体制、横断的・基盤戦略、生態エリア別戦略を取り上げて説明されました。

四人目は国立研究開発法人土木研究所自然共生研究センター長の森 照貴 氏で、『河川におけるネイチャーポジティブの実現に必要なデータとモデリング』という題目でお話いただきました。多自然型・多自然川づくりの実施により減少の程度が緩やかになったと考えられるものの、魚類の絶滅危惧種はそれでも徐々に減少している。河川環境がネイチャーポジティブになるためには「配慮型（緩和：ネットロス）」ではなく「回復型（緩和&創出：ネットゲイン）」を明確に企図した川づくりが必要である。これこそが「社会の根本的変革」であると考えている。河川のネイチャーポジティブ実現のために定量的な評価が大事で、使いやすいデータの蓄積と発展し続けるモデリングを使った予測の必要性について説明されました。

五人目はいであ株式会社の幸福 智 氏で、『ネイチャーポジティブの評価と促進に関する技術』という題目でお話いただきました。ネイチャーポジティブに関する自然資本の評価について、今後の有望技術や使い方、技術者として求められる素養、矜持として、デジタルツインで合意形成、目標設定、ファシリテーション用LLM、生成AI等の新たな技術も磨いていく必要がある。「社会の根本的変革」には、人の行動をうまく変えていく必要がある。行動変容の促進と場の状態評価をつなげるには、物理的モデルや生態系モデルといった測る技術だけでなく、それを動かしていくための社会のモデリングも必要である。我々技術者は個別分野の専門家だけでなく総合的に対応できなければならない。と説明されました。

パネルディスカッションでは、コーディネーターの埼玉大学の田中規夫教授のもと、5名の講演者が登壇し、流域と河川に焦点を当てた議論が行われました。流域に関する重要性として、関係者間の連携、取り組みの効果の見える化、地域性の考慮、人々の行動変容をもたらす方法の検討、社会のモデリングがあり、河川の定量目標の重要性として、定量評価と定性評価の両方が重要、流域総合水管理の概念について議論されました。ネイチャーポジティブの本質的な目標については、絶滅危惧種とされる種数を減らすこと、これを達成するための具体的な方策の検討が必要とされました。応用生態工学会の役割としては、絶滅危



森 照貴 氏の講演



幸福 智 氏の講演



パネルディスカッションの様子

俱種の保全に関する研究の推進、工学と生態学の知見を組み合わせた取り組みが重要といった意見が出ました。今後の課題として、行政・企業・研究者の連携強化、具体的な目標設定と評価方法の確立、社会全体の価値観の変革を促す取り組み等が必要であるといった意見が出ました。

本シンポジウムの参加者はオンライン参加を含め、約500名もの方にご参加いただきました。ご登壇いただいた皆様、運営にご協力いただいた皆様、そして参加していただいた多くの皆様のおかげで本シンポジウムを無事実施することができました。この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

報告：西浩司（大会実行副委員長／いであ株式会社） 田中規夫（大会実行委員長／埼玉大学）

6. 企業展示

企業展示は、応用生態工学会賛助会員 5 社、非賛助会員 2 社を含む計 7 社にご参加いただきました。展示としては、環境 DNA 解析サービス、野外電子野帳システムやVRを活用した景観予測など最新技術による調査・分析、水中カメラ及び動画解析・ドローンラジオテレメトリーシステム、AIやゲームエンジンを活用したインフラ整備・運用支援、外来種駆除や未規制物質インパクト把握・対策提案、BSC工法技術（土壌藻類を活用した自然にやさしい侵食防止/植生形成技術）、市民科学による生物調査・生物相推定・緑地設計シナリオ分析・生息地連結性解析など、各企業の技術サービスや製品を紹介していただきました。

報告：那花美奈（いであ株式会社）



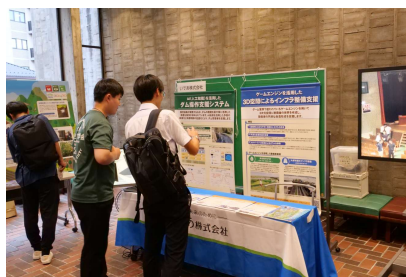
株式会社生物技研



株式会社建設環境研究所



株式会社田中三次郎商店



いであ株式会社



応用地質株式会社



日本工営株式会社



株式会社バイオーム



会場の様子

7. 懇親会

懇親会は、大会会場である埼玉会館内のレストランをメイン会場とし、隣接するラウンジをサブ会場として活用して開催しました。今回は 147 名（一般129名、学生18名）にご参加を頂き、大盛況の懇親会となりました。

懇親会は、占部先生の乾杯でスタートし、メイン会場では埼玉県内の食材を用いたレストランのお料理を、サブ会場では各地域研究会から持ち寄られた地域のお酒や名産品を皆さまにご堪能いただきました。また、来年の全国大会は新潟大学での開催となり、大会実行委員長の関島先生より次回大会に向けたメッセージをいただきました。最後に実行委員一同を代表して田中実行委員より挨拶させていただきました。

例年と同様に、普段はなかなか直接お会いする機会の少ない遠方の皆様と、お料理やお酒を楽しみながら2 時間があったという間に感じるような盛り上がった懇親会となりました。参加頂きました皆さまに改めて御礼申し上げます。また、地域研究会から美味しいお酒や名産品をご持参いただいた普及・連携委員の皆さま、ありがとうございました。

報告：加藤靖広（日本工営株式会社）



応用生態工学会占部会長



田中大会実行委員長



新潟大学関島先生



メイン会場の様子



サブ会場の様子（地域のお酒・名産品）



8. エクスカーション

大会開催地のさいたま市は、荒川の中流部に位置しますが、荒川はその名前のとおり荒ぶる川と言われ、洪水による氾濫が繰り返されてきました。その氾濫から首都圏を守るため、さまざまな治水事業が進められ、今年は荒川上流の改修、荒川放水路通水から100年となります。これまで、さまざまな治水事業が進められてきたにもかかわらず、令和元年の東日本台風(台風19号)では大規模な浸水被害が発生しました。将来の気候変動を踏まえ、荒川流域では「荒川水系流域治水プロジェクト2.0」が策定され、様々な取り組みが進められています。一方で埼玉県では「埼玉県生物多様性保全戦略(2024(令和6)年度～2031(令和13)年度)」が策定され、災害や気候変動等の様々な変化に対してもレジリエントである(柔軟で回復力のある)健全な生態系を確保することで、「ネイチャーポジティブ(自然再興)の実現」を目指すことが示されています。

今回のエクスカーションでは、荒川流域を中心にインフラ整備事業の場において「ネイチャーポジティブ(自然再興)の実現」に関連する取り組みに関わり、第一線でご活躍されている方を講師にお招きし、エクスカーション参加者の皆様と意見を交わしながら現場をまわりました。

いずれの視察先も、一般のボランティアや市民団体、近隣の小中学校、企業、行政、学識者等と連携した取組により効果を上げており、ネイチャーポジティブ(自然再興)の実現に向けて産官学民連携の重要性を実感しました。エクスカーションの開催・実行にご助力いただきました首都高速道路株式会社、埼玉県さいたま県土整備部、国土交通省荒川上流河川事務所、公益財団法人埼玉県生態系保護協会の皆様ほか、多くの皆様に深く感謝申し上げます。



エクスカーション参加者(荒川太郎右衛門地区自然再生地にて)

(1) エクスカーションの概要

1) 行程

令和6年9月21日(土) 9:00～16:30

JRさいたま新都心駅⇒見沼たんぼ首都高ビオトープ⇒芝川第一調節池⇒宝蔵寺沼ムジナモ自生地⇒荒川太郎右衛門地区自然再生地⇒JR大宮駅

2) 各視察地での状況

①見沼たんぼ首都高ビオトープ

「自然共生型の新しい都市高速道路」を目指し、埼玉新都心線の高架下の空間を活用して延長1.7km、面積6.3haのビオトープを整備したものです。見沼田圃地域の生態系を再生するため、平成14年より見沼田圃内の斜面林などから種子を採取し、近隣の農家に採取した種子の播種による苗木の生産を委託し、その苗木を植栽しています。平成23年には埼玉県の蝶であるミドリシジミを呼び戻すハンノキ・プロジェクトが近隣の小中学校との連携により開始されました。地域ボランティアの協力により管理やモニタリングが進められており、ホンダギツネやホンダタヌキをはじめとする約1,500種の動植物が確認されるようになりました。池沼では代掻きや草刈りが実施されており、タコノアシやカワヂシャも確認されています。一方、アレチウリの繁茂が問題となっており、隣接する

芝川から侵入してきていると考えられることから、芝川でもアレチウリの除去を実施しています。

高速道路の高架下を自然環境の再生の場として活用することで、地域の自然環境にとってプラスに働く事業としており、その効果の発揮のために多様な主体の関わりと順応的な管理を実施している視察地であり、事業を活用する視点と多様な主体の関わりと順応的な管理の重要性が感じられる視察地でした。



首都高の高架下に整備された池沼



ビオトープの説明に聞き入る参加者



再生されたハンノキ林



斜面林での採取種子から再生された樹林

②芝川第一調節池

芝川第一調節池は、洪水の調節機能の他、見沼田圃の自然環境保全の場としての機能を有しています。平成13年より、自然環境に関心のある市民と行政関係者の参加する検討会が開催され、計画立案や環境整備や維持管理に関する取組等について議論されてきました。生物多様性を考慮してデザインされた広大な水面や自然性の高い水際線を有する水辺環境や湿性草原、環境学習の場としての利用している草原、調節池と周辺地域とのコリドーとなることを意図して造成工事の際に調節池内から囲繞堤周辺に樹木を移植した箇所を視察しました。

この視察地では、再生した環境が動物のハビタットやコリドーや環境学習の場として活用されるために管理を実施し、その結果として活用されている場を視察することができ、計画当初のビジョンとそれを実現するための設計、そして管理が重要であることを実感できる視察地でした。



広い水面と自然性の高い水際を創出



造成時に移植された樹木

③宝蔵寺沼ムジナモ自生地

宝蔵寺沼ムジナモ自生地は、羽生市ムジナモ保存会、羽生市立郷土資料館、埼玉大学などの連携による自生地の環境復元が進められ、平成28年度から安定したムジナモの増殖が見られるようになり、令和5年には117万株ものムジナモが確認されるようになりました。現在は、コイ等の大型魚の捕獲や、アメリカザリガニやウシガエルの駆除、ヨシやマコモの刈り取りなどの活動を続けています。

日本でムジナモの生育が確認されている箇所は限られており、希少なムジナモが、水面一面に広がっている様子は感動的でした。羽生市ムジナモ保存会の皆様の活動と埼玉大学の皆様の研究成果が活かされた成果であることを実感することができました。なお、令和7年1月18日(土)にはワークヒルズ羽生にて金子康子埼玉大学名誉教授と安野翔氏(埼玉県環境科学国際センター)による講演会「ムジナモ復活の軌跡～希少植物再生への道～」が開催されます。



ムジナモ自生地



水路に多数生育するムジナモ



金子先生からの説明を聞く参加者



ムジナモを観察する参加者

④荒川太郎右衛門地区自然再生地

荒川太郎右衛門自然再生地は、荒川の旧流路とその周辺に良好な湿地環境が残る場所であり、太郎右衛門自然再生地の旧流路は、かつては荒川の本流でありましたが、1930年代の河川改修事業により本流は直線化し、残存した旧流路は、荒川河道内に遊水効果を高めるための横堤が建設されたことにより、本川から切り離された止水環境（池）が形成されました。この旧流路流路を管理せずに放置した場合、湿地の乾燥化や樹林の高木化、水生生物の生息環境の消失等の影響が予測されたことから、湿地環境の保全再生やエコロジカルネットワークの形成を図りつつ治水機能も確保する自然再生事業が進められています。協議会維持管理委員と一般募集ボランティアによる定期的な保全管理、地元の学校や本田航空、サイサン環境保全基金、セブン財団をはじめとする企業等との連携による除草作業や外来種除去、東京デザイン専門学校による広報物の作成など、多様な主体との連携により湿地環境の再生に向けた取組が進められていました。

地域住民の参加や、多様な主体との連携、教育・啓発活動、持続可能な管理、地域資源の活用、成功事例の共有、政策や制度の活用などの組み合わせにより、ネイチャーポジティブの実現につなげているものと考えられ、全国において参考となる点の多い視察地であったと感じました。



自然再生事業について説明する堂本氏



荒川から旧流路への呑口付近での議論の様子



横堤とその周囲の湿地



地域の小学校とのプロジェクトの説明

(2) 終わりに

今回の訪問先は、近年のネイチャーポジティブの潮流を受けて実施されているものではなく、以前より地域等との連携により取組が進められている事例地でした。これらの事例地での計画や取組内容やそれを進める実施体制は、今後、各地で進められると考えられるネイチャーポジティブの実現に向けた取組にとって参考となると感じました。現地において取組を進めている方からお話を伺うことができ、充実したエクスカージョンになったと感じます。ご参加いただきありがとうございました。

報告：池田正（八千代エンジニアリング株式会社）

9. 大会を終えて

新型コロナウイルス感染症の位置づけが「5類感染症」になってから1年余り、応用生態工学会でも昨年同様に、本年も研究発表（口頭発表、ポスター発表）、自由集会对面のみの開催とし、懇親会も開催しました。対面での開催により、やはり質の高いディスカッションを多く行うことができ、有意義な大会となりました。口頭発表・ポスター発表では合計で138件という過去最多の発表をいただき、大会は大盛況となりました。公開シンポジウム、エクスカーションも盛況で、生態学と工学との境界領域である応用生態工学が「生物多様性の保全」ひいては「ネイチャーポジティブ」の発展に大きく寄与できることを改めて実感しました。感染症に関しては研究を発表していただいた皆様のみならず、ご参加くださいました皆様が各々配慮をしていただくことで、大きな混乱もなく大会を開催することができました。

今回大会がこのような大きな混乱もなく大変盛り上がりのある会になったのは、ご参加いただきました皆様の素晴らしい研究・業務成果の発表をいただいたおかげであることは勿論のこと、大会の陣頭指揮を執って下さった田中実行委員長・西副実行委員長、当大会の準備・運営に携わってくださった実行委員メンバーに加え、学会本部のバックアップ、会場設営・当日運営をお手伝い頂きました学生の方々などの多くの関係者のご尽力の賜物と感謝申し上げます。

あらためて、ご参加いただいた皆様や大会運営に関わって下さったすべての皆様に、深く感謝いたします。

さいたま大会2024実行副委員長 西浩司 代筆 益子理



第 27 回さいたま大会2024実行委員会・大会運営メンバー

第27回さいたま大会2024 実行委員会

	氏 名	所 属
大会実行委員長	田中 規夫	埼玉大学
副委員長	西 浩司	いであ株式会社
実行委員	相崎 優子	八千代エンジニアリング株式会社
(五十音順)	安形 仁宏	株式会社建設技術研究所
	天野 邦彦	公益財団法人 河川財団
	荒木 隆	株式会社建設環境研究所
	五十嵐 善哉	埼玉大学
	伊川 耕太	株式会社建設環境研究所
	池田 正	八千代エンジニアリング株式会社
	上村 哲平	いであ株式会社
	宇野 友駿	株式会社建設技術研究所
	梅岡 真由	いであ株式会社
	江口 健斗	株式会社建設環境研究所
	大杉 奉功	一般財団法人 水源地環境センター
	太田 克哉	いであ株式会社
	柏本 ゆかり	パシフィックコンサルタンツ株式会社
	加藤 靖広	日本工営株式会社
	加藤 康充	オリエンタルコンサルタンツ
	川口 究	いであ株式会社
	木下 長則	株式会社建設環境研究所
	熊澤 一正	応用地質株式会社
	後藤 颯太	株式会社建設技術研究所
	崎谷 和貴	公益財団法人リバーフロント研究所
	島村 彰	株式会社建設環境研究所
	東海林 太郎	パシフィックコンサルタンツ株式会社
	関根 秀明	株式会社建設技術研究所
	高橋 陽一	一般財団法人日本建設情報総合センター
	丹野 幸太	アジア航測株式会社
	千葉 武生	株式会社建設技術研究所
	堂本 泰章	公益財団法人 埼玉県生態系保護協会
	那花 美奈	いであ株式会社
	西廣 淳	国立研究開発法人 国立環境研究所
	橋本 一成	株式会社建設環境研究所
	林 亮太	日本工営株式会社
	樋村 正雄	いであ株式会社
	平嶋 賢治	アジア航測株式会社
	藤野 毅	埼玉大学
	古旗 峻一	アジア航測株式会社
	堀 裕和	株式会社建設技術研究所

	前田 研造	いであ株式会社
	前田 範章	国際航業株式会社
	益岡 卓史	株式会社建設環境研究所
	益子 理	いであ株式会社
	村上 純一	いであ株式会社
	八木澤 順治	埼玉大学
	安谷 加織	パシフィックコンサルタンツ株式会社
	山本 英幸	株式会社オリエンタルコンサルタンツ
	Jayasanka Senaviratna	埼玉大学
学会本部	天野 邦彦	専務理事
	西牧 均	事務局長
	沖津 二郎	情報サービス委員、応用地質株式会社

6 廣瀬賞等授賞式の開催

令和 6 年 9 月 20 日さいたま大会の会場にて廣瀬賞等の授賞式が執り行われました。受賞者および受賞理由は以下の通りです。

【廣瀬賞】

神戸大学大学院人間発達環境学研究科・教授 源 利文氏 (51 歳)

源 利文氏は、マクロ生物の環境 DNA 分析の発展に多大な貢献を果たしてきた。源氏は環境 DNA を用いたウイルスの分布調査の際に、水中に魚類の DNA が大量に存在することを独自に見出し、技術開発を進めることで、世界初となるマクロ生物の環境 DNA メタバーコーディングに成功し、国内外におけるマクロ生物の環境 DNA 研究をリードしている。

源氏の環境 DNA 分析に関係するこれまでの研究成果は、(1) ウイルスなどの病原生物の環境中動態の可視化、(2) マクロ生物の環境 DNA 分析における先端技術の開発、(3) 環境 DNA 分析技術の標準化および一般化に大別され、合計 150 編の査読付き論文として出版されている（他のテーマに関する査読付き論文が 23 編あり、合計 173 編を出版済み）。なかでも (2)、(3) については応用生態工学への貢献が特に大きいと考えられるため、これらについて以下に概略を述べる。なお、これまでの論文被引用総数は、10409 件 (Google Scholar; 2024/4/27) である。

初期のマクロ生物の環境 DNA に関する研究は、単一種を検出する種特異的な検出しか行われていなかった。源氏は複数種の同時検出ができれば環境 DNA 分析の有用性がさらに高まると考え、複数種を同時検出する環境 DNA メタバーコーディングに取り組んだ。その結果、世界初となるマクロ生物の環境 DNA メタバーコーディングに成功した (Minamoto et al. 2012 Limnology)。これは水を汲んで DNA を調べればそこに生息する魚類相がわかるという画期的な手法であり、その後の手法の改善によって、魚種を網羅的に検出できる MiFish プライマーの開発や、それを用いた魚類分布調査への実装につながっている。この他にも、種特異的な環境 DNA の定量による個体数やバイオマスの推定、両生類など魚類以外の分類群における環境 DNA メタバーコーディング手法の開発、堆積物中の環境 DNA を利用した過去の生物相復元、環境 DNA の核/ミトコンドリア比を用いた繁殖時季の解明、環

境 DNA メチル化解析による繁殖タイミングの高精度推定手法の開発などに成功しており、現在も環境 DNA 分析の先端技術の開発を継続している。

環境 DNA 分析は、環境アセスメントや生物多様性調査などの社会的な事業に用いられつつある。例えば、国土交通省は 2019 年度より「河川水辺の国勢調査」の一部に環境 DNA 分析を採用しており、2026 年度より本格的に導入する見込みである。源氏はこれらの行政機関による環境 DNA 分析の導入に際しても、委員会委員などの立場から助言などを行っており、社会的な貢献度も高い。

また、このような技術の社会実装にあたっては、技術の標準化・一般化が欠かせない。源氏は環境 DNA 検出の季節性など、標準化に資する研究を行うとともに（例：Hayami et al. 2020 Ecology and Evolution）、環境 DNA 学会の会長、分析技術の標準化委員長などを歴任し、行政機関等の発注者、調査分析業務を担う民間企業、分析技術の研究を行う研究者といった様々なステークホルダーが統一的に用いることのできる標準的な分析マニュアル（環境 DNA 調査・実験マニュアル）の作成及び公開を主導した。現在、行政機関発注の業務では概ねこのマニュアルにそって解析が行われており、社会的に大きな貢献をなしている。

源氏は研究成果の社会発信にも力を入れている。一般向けの書籍（環境 DNA 入門 ただよう遺伝子は何を語るか、岩波書店）を刊行するとともに、これまでに 100 件以上の一般向け、小中高校生向けの講演会等を行ってきた。これらの講演会等の受講生の中から大学で環境 DNA 研究に取り組む学生が出るなど、次世代の育成にも成果をあげている

このように、源 利文氏の顕著な研究業績は、応用生態工学の研究発展や教育等に指導的役割を果たしている。また、極めて高く評価できる源氏の学術的および社会的貢献は現在も継続進行されており、今後の研究や学会における活躍が期待されることから、応用生態工学会廣瀬賞にふさわしいと判断され、第 1 回応用生態工学会廣瀬賞を授与することとした。



源利文氏賞状授与



源利文氏受賞講演

【研究奨励賞】

九州大学大学院農学研究院助教 小山 彰彦氏

国土交通省水管理・国土保全局河川環境課係長 中島 颯大氏

北海道立総合研究機構 産業技術研究本部 エネルギー・地質・環境研究所 三浦 一輝氏

小山彰彦氏は、水圏環境、特に河口・沿岸域の生物多様性の保全・再生を目的に活動している。ドローンを活用したカブトガニ幼生の生息適地面積の推定や eDNA の濃度から繁殖個体数を推定するなど、新技術の単なる適用に留まらず、その改良から新たな調査手法を導き出そうとする姿勢が、応用生態工学分野に今後優れた研究成果をもたらす可能性を感じさせる。査読付き論文も 45 編、応用生態工学分野に限っても筆頭著者・主要論文が 6 編あり、若手研究者として突出している。以上のことから、研究奨励賞の受賞者とする事とした。

中島颯大氏は、主に河川の魚類を対象とした集団遺伝学の分野を中心に研究を行ってきている。集団遺伝学のなかでも生物種の地域スケールでの集団遺伝構造を明らかにする景観遺伝学は、集団（個体群）間の遺伝子流動（移動分散に伴う遺伝子の流れ）や集団の遺伝的多様性と環境要素との関係を紐解くポテンシャルがあるため、環境変化における生息地間のつながりや個体群の頑強性の変化を明らかにするツールになり得ると考え、氏は、河川環境の動態解明や保全への活用を目指し重点的に研究に取り組んできた。研究成果が、今後の応用生態工学分野の発展に寄与することが期待されること、現在は行政の職務に就いているが、研究を進めることに強い抱負を持った上で、河川環境行政の中核という貴重な現経験をこの先の研究に活かしたいという姿勢を示していることから、研究奨励賞の受賞者とする事とした。

三浦一輝氏は、流域の人間活動と生物多様性および健全な生態系機能の維持の両立をテーマに研究を行ってきた。人間活動による劣化が著しい淡水生態系に着目し、世界で最も絶滅が危惧される分類群である淡水二枚貝（イシガイ目）を主な対象に、個体群の減少要因や生態系機能の解明を通したより効果的、効率的な保全策の提言を行ってきた。これらは、単なる保護の観点ではない、生態系管理の視点を示すもので、生息場保全のための実践的研究として評価できるものである。現在、ヒグマの生態と管理に関する研究に移行していることから、今後の展望の観点から見た場合、研究奨励賞候補としてふさわしくないのではないかという懸念も示されたが、害獣としての駆除という状況を人間活動、生物多様性、健全な生態系機能の維持の両立を目指すという抱負に鑑みて、研究奨励賞の受賞者とする事とした。



小山彰彦氏受賞講演



中島颯大氏受賞講演



三浦一輝氏受賞講演

【社会実践賞】

国立研究開発法人 土木研究所 自然共生研究センター

九州大学 流域システム工学研究室

応用地質株式会社・一般財団法人水源地環境センター

自然共生研究センターは、河川、ダム、流域を対象に、自然環境の保全・復元に関する応用生態工学的な研究を進めてきた研究機関である。これまでに多数の研究成果を公表するとともに、応用生態学に関わる多数の研究者および河川管理者を育成・輩出してきた実績があり、応用生態工学会および国・地方行政機関への貢献が非常に大きい。以上から、社会実践賞の受賞者とする事とした。

九州大学 流域システム工学研究室は、学術研究・教育と「川づくり」に関わる社会実装を連動させ、多様なステークホルダーと連携して水辺環境の保全について、研究室一体となり取り組んできた点に特徴があり、社会との関わりの深化に重点をおいており、社会実践という観点から評価できることから、社会実践賞の受賞者とする事とした。

応用地質株式会社・一般財団法人水源地環境センターは、三春ダムに関し、自主的な調査を 28 年間にわたって実施してきており、今後のダム事業に資するため、応用を意識して、その成果を学会発表するなど成果の公表を積極的に実施している。外部表彰も受賞している点も評価できる。以上から、社会実践賞の受賞者とする事とした。



土木研究所自然共生研究センター受賞挨拶



九州大学流域システム工学研究室受賞挨拶



応用地質（株）・（一財）水源地環境センター
受賞挨拶

7 第1期第4回理事会開催報告

第1期第3回理事会における決議事項、報告事項等について、下記の通り報告します。

開催日時 令和7年1月27日（月） 15時から17時15分

開催場所 Web 会議

出席者 理事総数 20名

出席理事 15名（定足数11名）

会長 占部城太郎

副会長 東信行、藤田光一

専務理事 天野邦彦

理事 沖津二郎、小俣篤、片野泉、佐藤高広、島村彰、関島恒夫（15時10分より参加）、平井秀揮、光成政和、柳川晃、吉村千洋（15時25分より参加）
渡邊康玄

出席監事 1名

監事 鳥居敏男

その他出席者 根岸淳二郎会誌編集委員長、河口洋一普及・連携委員長、石田裕子委員会再編 WG
事務局長 西牧均

議題

決議事項（1号議案から5号議案まで賛成多数で承認されました）

第1号議案 西監事の退任と対応方針の件

第2号議案 役員候補者選考委員会選出方針の件

第3号議案 令和7年度会費請求の件

第4号議案 廣瀬賞等の募集の件

第5号議案 新規入会希望者承認の件

報告事項

1 委員会再編 WG 報告

2 任意団体からの財産譲渡の経過報告

3 会誌編集委員会からの報告

4 普及・連携委員会からの報告

5 令和 7 年度全国大会

その他事項

1 地区会について

2 要望書・意見書等の作成手続きについて

3 ELR の開催年について

8 西浩司監事のご逝去について

西浩司監事におかれましては、令和 6 年 12 月 16 日にご逝去されました。ご冥福をお祈りいたしますとともに、心よりお悔やみ申し上げます。ご生前の応用生態工学会への多大なご貢献に深謝いたします。

ご逝去に伴い、監事の職は退任されることとなります。その結果、監事は、鳥居監事お一人となりますが、監事の選定のためには、総会による決議が必要です（定款第 23 条）。このため、9 月に開催予定の総会時に後任監事を選定することが第 4 回理事会で決定しました。

9 応用生態工学会福岡 第 10 回遠賀川中島自然再生勉強会報告

応用生態工学会 福岡

齋藤 剛（西日本技術開発(株)）

1. 遠賀川中島について

中島は、九州北部、一級河川遠賀川の下流に位置する中州で、国土交通省遠賀川河川事務所により遠賀川中島自然再生事業が行われました。自然再生事業では、遠賀川の流域や河川で失われた湿地を創出し、多様な生物が生息・生育する河川環境を再生することを目的に、掘削による湿地の再生やヨシ原の保全などを行い、次世代に引き継ぐ未来の遠賀川の川づくりが行われました。

2. 遠賀川中島自然再生勉強会の概要

応用生態工学会福岡では、平成 23 年度に「遠賀川中島自然再生研究会」を立ち上げ、遠賀川河川事務所より中島を研究フィールドとして提供頂き、学会員を中心とする研究会メンバーにより、応用生態工学的な研究を進めてきました。

平成 30 年度には、名称を「遠賀川中島自然再生勉強会」に改め、自然再生協議会、流域住民団体、遠賀川河川事務所、学識者、コンサルタント等で活動や調査結果を共有し、今後の中島について議論してきました。今回は、新たな生物多様性国家戦略が掲げる「ネイチャーポジティブ（自然再興）」の考え方を取り入れ、中島を含む遠賀川流域における川づくりについて、ネイチャーポジティブの視点で議論しました。

・遠賀川中島自然再生勉強会 役員（敬称略）

会長：鬼倉徳雄(九州大学) 副会長：皆川朋子(熊本大学)、林博徳(九州大学)

3. 実施内容

【日 時】令和 7 年 1 月 29 日（水）13:15～16:45

【場 所】遠賀川水辺館【参加人数】68 名

【演題・発表者】

第 1 部：基調講演

- ・ネイチャーポジティブと自然再生（九州地方環境事務所 則久雅司所長）

第 2 部：遠賀川の自然環境

- ・遠賀川の貴重な自然環境（西日本技術開発株式会社 井原高志主任）
- ・中島自然再生協議会の活動報告（中島自然再生協議会 岡山昭明事務局長）

第 3 部：河川管理者の取り組み

- ・遠賀川における河川環境保全の取り組み（遠賀川河川事務所 大坪摩耶係長）
- ・福岡県の多自然川づくりの取組み（福岡県県土整備部 松尾弦矢主任技師）

第 4 部：いい川について考える

- ・いい川とは？いい川づくりとは？（九州大学大学院 林博徳准教授）
- ・魚がいっぱいの川の横断形状とは（九州大学大学院 森優斗）
- ・遠賀川のいいところ、わるいところ（九州大学大学院 鬼倉徳雄教授）

第 5 部：総合討論

- ・遠賀川でネイチャーポジティブな川づくりを考える（座長：九州大学大学院 鬼倉徳雄教授）

【発表概要】

基調講演では、九州地方環境事務所則久所長からネイチャーポジティブをめぐる昨今の動向についてご説明いただき、ネイチャーポジティブの実現には社会変革が必要であり、生物多様性増進活動促進法等の活用により、生物多様性を身近な土地、企業・ビジネス、社会（住民）と結びつけることが重要であること等をご講演いただき、遠賀川でネイチャーポジティブを考える上でのヒントを多数いただきました。

次に第 1 部では、西日本技術開発(株)の井原主任から遠賀川で特に重要な生物や、遠賀川水系で守るべき重要な環境についてご説明いただきました。本発表では、国管理区間において近年確認されていない種が、県管理区間で生き残っていることも示され、県管理区間の重要性と国管理区間におけるネイチャーポジティブの可能性が示唆されました。中島自然再生協議会の岡山事務局長からは、中島の自然を守るための地道な活動についてご説明いただきました。毎月の清掃活動、自然観察会、外来種駆除、竹の繁殖防止、火入れ、交流イベント等様々な活動に取り組んでいる一方で、活動の人手不足が課題になっていることも分かりました。

第 2 部では、遠賀川河川事務所の大坪係長と福岡県の松尾主任技師より、国と県の河川環境保全に関する取り組みについてご説明いただきました。大坪係長からは、河川内にとどまらず流域全体の生物多様性の向上に関する事業内容や自然再生計画の作成、遠賀川流域環境サポーター制度「エコサークルおんががわ」の取り組み等についてご紹介いただきました。松尾主任技師からは、多自然川づくりの発表会や研修会の実施、川づくり等の書籍の発行等により職員の多自然川づくりの意識づくりに取り組んでいることをご紹介いただきましたが、まだ技術的な課題が多いことも分かりました。

第 3 部では、九州大学の先生等から、最新の研究成果も含めてお話しいただきました。林准教授からは、応用生態工学会第 27 回さいたま大会自由集会での議論内容もご紹介いただき、いい川づくりには数値目標だけでは不十分であり、多様な価値観をもった立場の異なる人たちのコミュニケーションを進め、民官学の連携と創造的協働の姿勢が重要であることをお話しいただきました。森様からは、魚がいっぱい

の川の横断形状について、最新の研究成果をご紹介いただき、河川敷消失による氾濫原の減少は、氾濫原性種の生息に負の影響を与えること、掘削による河床の平坦化は、淡水魚全般の生息に負の影響を与えることを学びました。鬼倉教授からは、遠賀川水系におけるネイチャーポジティブでは、川だけではなく、農業用水路やため池の活用が重要であること、身近な好事例を遠賀川でも実現できる可能性があること、流域治水対策がネイチャーポジティブに寄与すること等についてご教授いただきました。

最後に総合討論では、各所属の代表者が対面で座り、遠賀川を今後どのような川にしたいかについて参加者の皆さんが熱く語り、今後の遠賀川の川づくりについて想いを一つにしました。



勉強会の様子

4. 今後の予定

遠賀川中島自然再生勉強会は今回で終了し、今後は九州全域及び沖縄に活動範囲を広げ、様々な取り組みを行っていく予定です。

10 応用生態工学会第 28 回新潟大会の開催案内

応用生態工学会第 28 回新潟大会は、以下の予定で開催されます。参加申し込みにつきましては、準備出来次第、ご案内いたします。皆様のご参加をお待ちしております。

応用生態工学会第 28 回新潟大会

(1) 開催時期 : 2025 年 9 月 11 日 (木) ~14 日 (日)

(2) 開催場所 : 新潟大学 五十嵐キャンパス (各種発表 9/11、9/12)

朱鷺メッセ 国際会議室 (公開シンポジウム 9/13)

エクスカッション (9/14、対象地は県内などで今後検討)

(3) 形 式 : 基本対面形式で実施 (口頭発表、自由集会、ポスター発表)

公開シンポジウムのみ対面とオンラインのハイブリッド開催

11 事務局より

今後、住所等の連絡先変更は「マイページ」にてお願いします

1. これまで会員情報の変更登録は、学会ホームページの「会員登録情報変更フォーム」に入力し送信していただいていたましたが、3 月 17 日以降はマイページ

(<https://ecesy.smoosy.atlas.jp/mypage/login>) をご利用ください。

会誌(希望者のみ)のお届け、ニュースレター、その他の連絡では、かなりの「不達が発生」しています。

連絡先等の変更連絡をよろしくお願いいたします。

退会の申し出は「退会フォーム」にてお願いします

退会の申し出については、事務局の見落とし等をさけるため、①「学会ホームページ退会フォーム」または ②「事務局あてに退会の連絡メール」 により連絡をお願いいたします。

会員数の比較

令和 6 年 8 月 2 0 日現在の会員数と前年との比較

	R7 年 2 月 14 日	R 6 年 8 月 2 0 日	増減
正会員	839	841	-2
学生会員	141	141	0
賛助会員	46	45	1